

環境週間における研究室一般公開について

山本真理 香川 淳 古野邦雄

1 はじめに

当センターでは、環境週間関連行事としての各研究室一般公開及び公開講座等を実施しており、地質環境研究室は、これらの機会をとらえて、地質環境教育の普及を図っている。

2009 年度は一般公開期間中計 310 名の見学者があり、うち 4 割以上が「小学校から大学までの学生（以下「学生」と記す。）」であった。これら見学者の属性や意向等を把握し、次の一般公開に反映させるため、2008 年度^{1),2)}に引き続き展示等に関するアンケート調査を実施した。

2 調査方法

実施期間：2009 年 6 月 1 日（月）～7 日（日）

（研究室一般公開期間）

対 象：地質環境研究室見学者

実施方法：アンケート用紙留置法，自記入式

調査項目：見学者の属性（年代，性別，居住地），情報の入手方法，展示内容（「興味深かった展示」等）について。

3 調査結果

3・1 見学者の内訳

全見学者 310 名のうち、公開講座、学校等からの「団体見学者」が 220 名、それ以外の「個人参加者」は、90 名であった。また、全アンケート回答者は 171 名、回収率は 55.2%であった。

環境週間の日別見学者数及びアンケート回答者の性別・年代分布等を図 1～3 に示す。見学者を日別に見ると、土日の見学が全体の約半数を占め、特に「個人参加者」に限ると約 2/3 となっている（図 1）。また、アンケート回答者全体の年代分布（図 2）から「学生」及び「60 代以上」が、主な見学者であること、うち「個人参加者」（図 3）は、小中学生とその引率者が過半数と推測される。

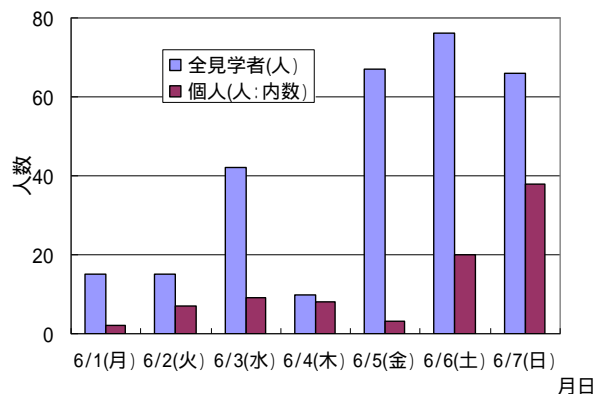


図 1 日別見学者数

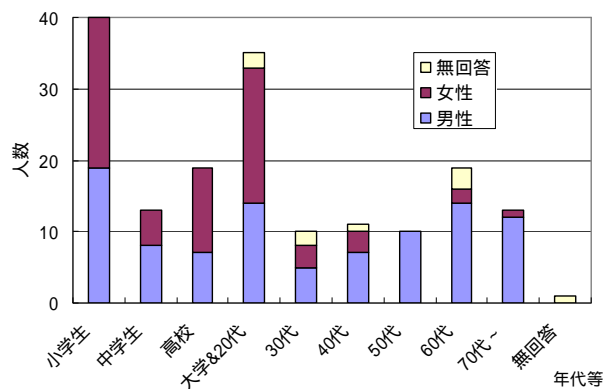


図 2 全回答者の性別・年代分布(n=171)

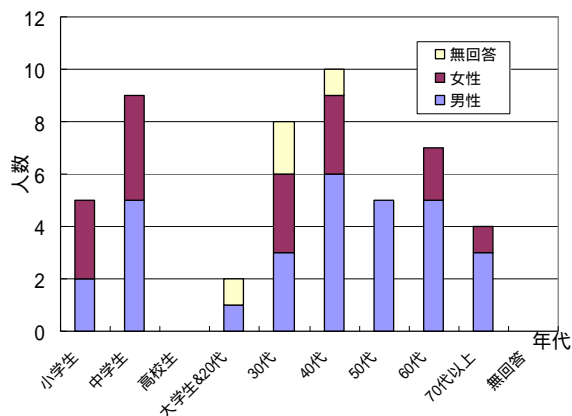


図 3 「個人参加者」の性別・年代分布(n=50)

見学者の居住地は「個人参加者」に限ると回答者の約 6 割が千葉市内で、内美浜区が過半数である。「研

研究室一般公開」の情報の入手先としては、「個人参加者」では、「職場・学校・友人等から」と並んで「看板を見て」が多く、近隣住民が立寄っていることが推測される。

3・2 展示内容について

「興味深かった展示」について全回答者を対象とした2008年と2009年の比較を図4に示す。

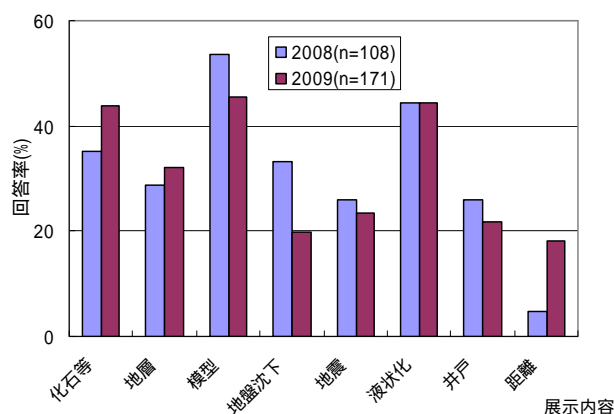


図4 「興味深かった展示」の前年との比較

概ね「地下水流動等模型」「液状化実験」「化石等」の上位項目は一致するが、2008年度の調査で回答率の分布について、「学生」と「学生以外」で有意差(²検定: $\alpha=0.05$)が認められたため、2009年度は回答者を、「小学生」「中学生」「高校生」「大学生」「一般」に分類して比較した。

回答率の分布(2009年 属性別)を図5に示すが、団体や年齢により回答率に有意差(²検定, $\alpha=0.05$)が認められた。

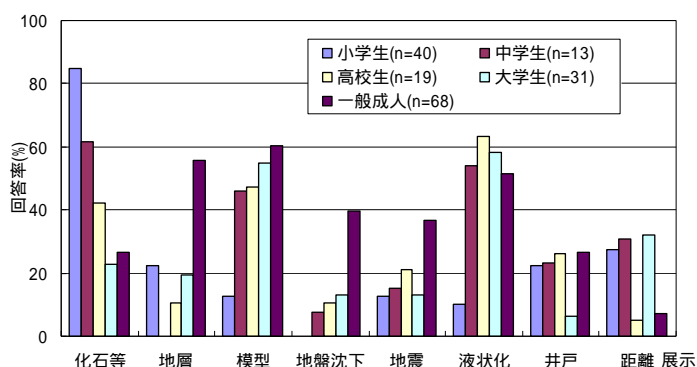


図5 興味深かった展示
(小学生から一般まで回答率の比較)

「化石等」については、ほぼ年代が低いほど回答率が高く、一方「地層」や「地盤沈下」については、「学生」に比べ「一般成人」の回答率が高い。特に、「小学生」については、中学生以上と比較して「地下水流動模型」「液状化実験」の回答率が低いことから、見学者の年齢等を踏まえた説明や時間配分が必要と思われる。

満足度については、昨年とほぼ同様¹⁾回答者の97%が「満足」又は「概ね満足」と回答しており「不満足」とする回答はなかった。

「今後研究を強化してほしい分野」については、「地質(地下水)汚染」に次いで「地盤沈下」「地球温暖化問題」への期待が高かった。

4 今後の研究室一般公開の課題等

今回のアンケートで好評であった「地下水汚染模型」等については、今後も継続していくが、「化石等」や「地下水流動模型」など見学者の年代やグループを考慮した説明等を行っていく必要がある。また、土日近隣等の住民参加が期待できるため、それに対応した体制を作ることが必要である。

今後も、同様な調査を継続し、見学者の増加と満足度の向上を図っていく。

引用文献

- 1) 山本真理, 吉田 剛, 古野邦雄, 風岡 修, 楠田 隆, 香川 淳, 加藤晶子, 酒井 豊: 研究室公開における地質環境教育, 第18回環境地質学シンポジウム論文集, 159-164(2008)
- 2) 山本真理, 吉田 剛, 古野邦雄: 研究室一般公開(アンケート調査から), 千葉県環境研究センター年報第8号 p.166 (2009)

